独房に集る蛆

押川彩加

乾いた土に焼けただれた光景
母の子宮の羊水の中をスイスイ泳いでいた母胎児の時
私は神と対話をしていた
「何故、産まれるのか？」
運命だわ神の血を浴びれて
焼野が原に爆撃で焼けただれた戦地の上で屍に囲まれ私は泣いていた
虫けら以下の己
生きることに絶望した己
真っ赤に燃える夕日に眼をギラリと光らせた
私を疎外物にしたことを後悔しなくて良いのです
人としての扱いを受けなかった
戦場の中に黒い雨
皆　溶けて消えていった
「さよなら」も言わずに、
最後に焼き付いたのは純粋な笑顔だった
飢えを凌ぐために身体をうる少女
泥棒は手足を切断され十字架に貼り付け状態
希望は僅かな水とパン
地獄の炎に焼かれろ
全て消えてしまえ
独房の中に一筋の光が見えるだけ

酒場

今日は酒場で盛り上がるぞ
酒を持って来い
傷には酒が一番だ
孤高に耐えた戦士
孤高が絶頂の時ほど死は恐くない
浴びるように飲む酒が笑いのツボさ
厳密に言えば、一分一秒先の命も保証出来ねえ
だったら笑うしかない
わはっはっわはっはっ
酔いは廻る、錯乱状態で意識も解んねえ
気付いたら片腕がもげてるじゃねえか
消毒だ酒持って来い
今日は最高に良い気分だ
最高に明日の死を夢見る

自己陶酔

生きているのか、死んでいるのかさえも解からない死体のような
私は、真っ暗な闇に小さく光る輝きだけを頼りに生きた
人の眼ではなく、他からの見えない何かに、震え脅えている
これが夢なのか、現実なのかも区別がつかない世界で私は幻影を
見つづける
狂いに狂った、私の脳味噌を誰も止める事は出来ない
妄想世界に汚染され、誰も見ない夢を私は見る
この世界が夢ならば早く覚めて欲しい
私の思考回路は寄生虫のように創造世界が増殖する
増殖が止まらない
この惑星では私はまるで、異世界の生き物でしかない
神は何故、私の魂を復活させた？
虫けらのように闇に潜む空間に私は存在している
宇宙空間が数秒間だけいつも止まる
私はいつも絶望と希望に左右されてしまう
人間は私を愛さない
私を愛すのは神だけだ

祭り

あの日も、真っ赤に燃える太陽を見上げていた
燃える太陽が真っ二つに割れ、真っ黒になって堕ちた
終幕の時、私はまだ二十歳だった
だが人生という残酷な審判を突き付けられているようだった
私の親は殺人犯であり、現在刑務所にぶち込まれている
そして私は施設送りにされ、「殺人者の子供」として生きている

私がまだ母親の子宮に居る頃
私は羊水の中で死刑を待っていたのだ
元々、望まれない命
産まれる前に息絶えてしまえば良かった
囚人服を着たような医者に私は取り出された

私の父と母は別に愛し合ってもいなかった
子供も嫌いだった
私が産まれてすぐに事件は起きた
父が母の首を締めて殺してしまったのだ
裁判所で父は下を向きながら「殺すつもりは無かった」そう告白した